

あとがき

人生は波である 照る日曇る日である

専修大学スポーツ研究所長

佐藤 雅幸



(故) Dr. Alf Thorstensson 教授

「ビーセス（またね） また直ぐに戻ってくるよ・・・そうだな 2年後には必ず・・・」とストックホルムを後にしたのは旧市街地ガムラストン傍の湖面の氷が解け始めた 1995年3月末であった。その一年前 1994年3月末、私は最新のスポーツ科学を学ぶためにカロリンスカ研究所（バイオメカニクス&モーターコントロール）& GIH（ストックホルム体育大学）、Dr. アルフトールステンソン教授の元に留学する機会を得た。その年の2月は、リレハンメルオリンピックが開催されて、ノルディックスキー複合団体が日本チームが金メダルを獲得した事を鮮明に覚えている。最終ランナー萩原健司選手が、日の丸を振りながらピョンとジャンプしてゴールインした姿を心に刻んでの渡瑞（スウェーデンへ）となった。

あれから20年、偶然にも私はストックホルムでソチオリンピックの閉会式を観ていた。

15歳の天才少年、平野歩夢選手やベテランジャンパーのレジェンド葛西紀明選手、そしてアイススケート羽生結弦選手の金メダル、20年ぶりとなるノルディックスキー複合ノーマルヒルの渡辺暁斗選手の活躍、さらに、とても残念だった高梨沙羅選手や浅田真央選手の事を考えていたら「人生は波である」という言葉が浮かんできた。この言葉は、恩師長田一臣先生の著書「スランプに挑む」の中に記されている。毎年開催されるワールドカップでは勝ち、世界一の実力は持っているものの、どうしてもオリンピックだけには縁がないという選手の事例やオリンピック独特の波長と個人の波長との不具合の話、そしてそれを乗り越えるためのヒントがそこには述べられている。

今年も「あとがき」を書かせていただく時期になった。これで4回目となり、偶然にも



ソチオリンピック会場風景





スポーツ研究所公開シンポジウム

オリンピックの周期と重なる。専修大学社会体育研究所から専修大学スポーツ研究所に名称変更して初めての所報となるが、本研究所の活動を振り返ると、4年前に蒔いた種が確実に実ってきているように思われる。例えば、オリンピック&パラリンピック誘致を視野に置いての「スポーツレガシーシリーズスポーツ研究所公開シンポジウム」、国内外のスポーツ研究機関との「合同研修会」そして「中高年およびジュニアアスリートのためのスポーツ実践公開講座」などを地道に実践してきた中、タイミング良く2020年東京オリンピック&パラリンピック開催も決定した。その流

れを受けて、松浪健四郎日体大理事長、体操の田中理恵先生そして本学の長澤和輝選手（経営4年 ブンデスリーガー FCケルン所属）を招いてのスポーツレガシーシンポジウムは、超満員の観衆の中で実施することができた。加えてソチオリンピックでは、葛西選手の活躍もあって、本研究所のシンポジウムのキーワードである「レガシー」と共通性のある「レジェンド」という言葉も浸透した。まさに、本研究所の活動は、先見の明があり、苦しい時でも決してぶれずに信念を貫き通してきた結果だと自負している。研究者においてもアスリートにおいても、そし

て其々の人生においても、大切な事は自分の持っている能力を十分に発揮することである。思い通りにいかない時でも決して腐らず、ぶれず、「人生は波であり、照る日もあれば曇る日もある」とそれを自然に受容する心を持つ事が寛容なのだと思った次第である。

今年もスポーツ研究所の個性的なスタッフ全員が力を合わせて、2013年度の所報を完成することができた。ここに玉稿を賜った方々とスポーツ研究所の活動にご協力頂いている皆様に心から感謝申し上げます。



専修大学スポーツ研究所

佐藤 雅幸	齋藤 実
野呂 進	平田 大輔
吉田 清司	時任真一郎
佐竹 弘靖	渡辺 英次
佐藤 満	富川 理充
飯田 義明	相澤 勝治
久木留 毅	李 宇諤

専修大学スポーツ研究所報 2013

平成 26 年 3 月 31 日
 発行者 佐藤 雅幸
 発行所 専修大学スポーツ研究所
 〒 214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1
 電話・ファクシミリ 044-911-1032
 E-Mail sports@isc.senshu-u.ac.jp

デザイン 山岸淳デザイン(株)